

図書館情報学橋会会報 第9号(通号15号)

2010年3月発行 発行者 社団法人茗溪会支部図書館情報学橋会

素晴らしき先輩たちの心意気を繋いでいきたい 3

図書館情報学橋会会長 森 茜

(図短別・昭40卒)

図書館文化史論を打ち立てた人

…藤野幸雄先生のこと…

『「歴史はシュメールに始まる」かどうかは別として、……』という書き出しの一文を読んだだけで、私たちは、一挙に、人類4000年の悠久の世界に誘われる。この時間的にも空間的にも果てしない広がり文化世界へ、“図書館”という船に乗せて連れて行ってくれること。これが、藤野幸雄先生の最大の特徴である。その船は、まるで翼があるかのように、古今東西、自由自在である。

藤野幸雄先生は、東京外国語大学卒業後、1957年(昭和32年)に図書館職員養成所を卒業し、東京の国際文化会館の図書室長を経て、1979年に図書館情報大学の教授になられた。本誌のこのシリーズでは、先輩も後輩も さん又は 氏で通しているのだが、藤野幸雄氏だけは、後に述べる理由で、藤野幸雄先生と呼ばせていただきたい。

私が図書館情報大学事務局長に赴任したとき、藤野先生は既に副学長としての5年目を向かえ、文系と理系の複合分野としてスタートした図書館情報大学の文系のシンボリック的存在だった。

冒頭の文章は、私が事務局長になって2年目、1998年8月に、「図書館情報大学開学20周年・創基80周年記念特別展」と銘打って、大学の蔵書を中心に「…粘土板から電子図書館まで…」という一大展示会を東京・丸善で開催したが、そのときの『解説目録』の巻頭言である。この展示会は、当時、新聞紙上でも評判を呼び大学の名を高からしめるのに大いに役立ったが、文系文献学・図書館学から理系情報学・建築学までを俯瞰する図書館情報大学らしい企画だった。

社会文化史論としての図書館史

大学は、開学1986年に大学院修士課程を持っていたが未だ博士課程はなかった。事務局長就任早々

の私の大きな仕事は博士課程の設置であった。時代は、急激にIT化社会へ転換し、図書館情報大学もその波に遅れることは許されなかった。新しい博士課程も“情報技術”に傾斜せざるを得なかったのだ。そんな中であって、藤野先生は、“図書館”を人類の社会的営みの中に捉え、4000年の社会文化史の中に求めた。古今東西の図書館の実態をそれぞれの歴史的背景の中に解き、その結果を大英博物館、国立国会図書館、アメリカ議会図書館を始めとする膨大な各国図書館研究に著した。それらは、実学としての図書館の実態に頑固なまでにこだわりつつ、悠久の図書館文化史観を確立している。

橋会先輩後輩のあまたある中で、藤野氏の前にも後にも、このような形で、図書館学の中核的分野を確立した人物はいない。私が藤野幸雄氏を藤野先生と呼ぶ所以だ。

図書館文化史研究の系譜を継ぐ人

…寺田光孝氏のこと…

藤野先生の偉大さにもう一つ付け加えるなら、先生の開拓した“図書館文化史研究”分野に後継者を育てたことである。その第一は、図書館短大別科昭和46年(1971年)卒の寺田光孝氏であろう。1998年の展示会の西洋編の成功は寺田氏に負うところ大であるが、現在、図書館司書課程の多くの現場で使用されている「図書・図書館史」は、藤野氏の系譜を受けて、寺田氏が力を注いだものだ。そこには、公共図書館の実学一点張りの図書館史論に、人類が脈々と受け継いできた“知識と思想”、“学術と研究”の系譜が継承されている。

ただ、寺田光孝氏も、昨年、筑波大学図書館情報学群の教授を定年退官した。そして、その後、筑波大学図書館情報学類において、藤野先生の確立した図書館文化史論を継承する研究者は見当たらない。とても、残念だ。

公文書管理法の成立と図書館、公文書館、そして筑波大学

筑波大学図書館情報メディア研究科准教授 白井哲哉

昨年(2009年)9月に着任した白井と申します。これから筑波大学図書館情報メディア研究科の発展のため、微力ながら精一杯つとめる所存です。

私の専攻は日本地方史とアーカイブズ(記録資料)学です。アーカイブズ(archives)という言葉には、人間の組織の活動に伴って作成、保存管理される文書・記録(記録資料)群と、それらを保存公開する施設の2つの意味があります。アーカイブズ学は、記録資料群を「集合的記憶」としてとらえ、それらの構造や機能、保存管理や閲覧公開のシステム、さらに具体的な施設・機関のあり方を研究対象とする学問領域です。海外では図書館情報学の中で研究が行われています。日本では、歴史資料(古文書)の保存利用運動を進める過程で海外の動向が紹介され、国文学研究資料館や国立公文書館を中心に研究が蓄積されてきましたが、まだ発展途上の分野です。

このアーカイブズ学と密接にかかわる最近のトピックが、昨年7月1日付で公布された「公文書等の管理に関する法律」いわゆる公文書管理法です。この法律は、直接には“消えた年金記録問題”などを引き起こした国の不適切な公文書管理システムを是正する目的で、福田康夫元内閣総理大臣のリーダーシップの元に成立しました。しかし成立に至る背景には、「公文書等を歴史資料として保存し、利用に供することの重要性」を明記して1987年に成立した公文書館法と、「国民主権の理念にのっとり、行政文書の開示を請求する権利」を定めて1999年に成立した情報公開法がありました。

公文書館法は、公文書等(古文書を含む)を国や地域のアイデンティティー(歴史的存在証明)に関わる資料と規定します。情報公開法は、公文書が国民の知る権利を保障するアカウンタビリティ(説明責任)のための証拠資料と規定します。アーカイブズ学では、記録資料が保存活用される重要な契機としてアイデンティティーとアカウンタビリティを重視しています。そして公文書管理法は、その2つの観点に基づいて公文書管理システムを構築したのです。

法案の可決にあたり、衆参両院で付帯決議がなさ

れました。この中には、「一部の地方公共団体で公文書館と公立図書館の併設を行っていること」を踏まえて、両者の併設を可能とするような支援等を求める旨の内容が含まれています。京都府総合資料館や、新潟県立図書館・文書館などの事例が前提にあると思われます。公文書館施設の全国組織である全史料協(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会)では、早くも昨年11月の大会において、図書館と公文書館の連携をどう進めるべきかが話題に挙がりました。

図書館は、約100年前から古文書等の郷土資料を受け入れ、戦後は地域行政資料を積極的に収集し利用提供してきました。その蓄積を有する図書館と公文書館の連携が、今後一層進む可能性を、私は感じています。

アーカイブズ学に対し各大学では、2008年に学習院大学が初めて大学院専攻科を設置し、九州大学も専攻科開設を準備中と言われ、様々な対応が始まっています。その中でも、図書館情報学以来の学的伝統を有する筑波大学図書館情報メディア研究科は、海外との共通基盤の上に日本アーカイブズ学の発展へ取り組むことができる大学です。

筑波大学知識情報・図書館学類では、2009年度3学期から3・4年次対象科目「古文書論」で、アーカイブズ学の観点から古文書を論じるとともにアーカイブズ施設の内容も講義しています。2010年度には、同大学院図書館情報メディア研究科博士前期課程で講義科目「専門情報・資料論(アーカイブズ)」が開設され、アーカイブズ資料とその活用論、アーカイブズ・システムと施設運営論などに関する授業が始まります。

近い将来、筑波大学で図書館情報学とアーカイブズ学を習得した学生・院生諸君が、図書館と公文書館の発展のため活躍するよう私は願っています。そのためには、伝統と蓄積を誇る橋会会員のみならずの御理解と御協力が欠かせません。なにとぞ今後の忌憚ない御意見と暖かい御支援を賜りますよう、よろしく申し上げます。いつでもお気軽に声をおかけください。

この人にときめき

今回登場して頂くのは、筑波大学情報メディア研究科博士課程在学中の岡部晋典さんと佐藤翔さんです。お二人は、情報メディア学会第8回研究大会(2009.6)において、ポスターセッション最優秀賞を受賞されました。研究発表の内容は、インターネットを通じ学術情報を無料で提供することを目指すオープンアクセス運動についてです。この運動を支援しているOpen Society Instituteおよび彼らが中心となり宣言したBudapest Open Access Initiativeの思想的背景を概観し、その思想が現在のオープンアクセス運動に如何に受容されているかを分析したものです。

出会いから生まれた異質な二人のCHEMISTRY

筑波大学図書館情報メディア研究科 博士課程
岡部晋典、佐藤翔

春日キャンパスにはラーニング・コモンズ(LC)が設置されている。LCとは自主的な学生同士の学習を支援する場で、先輩学生がスタッフになって下級生の学習を支援するものである。岡部と佐藤はその創設時のスタッフである。LCで岡部が何の気なしに佐藤に話しかけた一言がきっかけで、共同研究に発展することになったのだから、人の縁というのは面白い。「佐藤くん、君が最近よく研究しているオープンアクセスってのがあるけど、あれ多分裏側に、オレが夢中になってた哲学者の思想があるよ」「えっ?...何ですかそれ?じゃあやみましょう!」「えっ」

岡部は人文系のテキストは読むものの数字はからきしである。佐藤はデータ分析は得意なものの人文系の専門書はほとんど読まない。性格は似ていると共通の友人には評されるものの、同じ研究科に在籍していても研究スタイルは正反対である。LCがなければ研究上の接点すらなかったはずである。しかし共同研究は予想を裏切りうまくいった。研究は理論面を岡部が、実証を佐藤が担当し、行き詰まったら深夜だろうが互いの研究室を行き来しディスカッションを行った。適切なコメントを適宜行うだけで悪餓鬼二人を放任してくれた我々の指導教員のお陰もあり研究は進んだ。

発表後の反響はなかなかのものだった。懇親会では色々な方からご意見をいただき、是非とも直ぐに論文にすべしと励まして下さった先生もいらした。光栄にも来場者の投票により最優秀ポスター発表にも選出して頂いた。ただしここで恥を忍んで白状すると、岡部はポスターセッション+口頭発表にも拘わらず、ころっとポスターを持って行くのを

忘れた。このような些細なトラブルはあったものの同発表を加筆・修正し、現在共著で投稿中である。

予期せぬ収穫もあった。お互いの手法・技法を学ぶことで新しい研究領域に二人とも踏み出すことができたことだ。岡部は計量的に文献を扱う方法を活かし国際会議で別のテーマで発表し、更には統計を用いる研究をはじめた。佐藤はオープンアクセス運動の理念について得た知見に基づき、現在の図書館等の取り組みを検討する論文を投稿中である。

LCという本来は別の目的を持つはずの土壌は、なぜか我々の共同研究という実を結んだ。複数のディシプリンを内包する、総合領域としての図書館情報メディア研究科ならではだろう。図書館情報学の持つはずの、越境する力をもっと活用していきたいというのが二人の望みである。そのためには、面白そうな研究をやっている学友連をナンパしようとする日々である。お茶に誘うのでなく研究に誘うのである。これは健全なのか不健全なのか皆目見当がつかぬが、悪餓鬼二人は今日も研究科をゆく。



佐藤翔さん(左側)、岡部晋典さん(右側)

全卒業生交流会「^{だいたちばなかい}大橋会」の開催

2009年10月11日(日)午後

筑波大学の「ホームカミングデー」にタイアップして、筑波大学図書館情報専門学群・大学院図書館情報メディア研究科およびその前身諸学校の全卒業生を対象とした「大橋会」を開催しました。大橋会は、筑波大学図書館情報学群との共催による「キャンパスツアー」と「青山七恵と気軽な朗読会」、及び橋会単独主催の「卒業生懇親会」の3部構成。橋会会員であるか否かを問わず、卒業生が相集い、友好を深めました。

青山七恵と気軽な朗読会

芥川賞作家の青山七恵さんをお招きして、青山さんの作品に耳を傾け、青山さんのお話を聞く会を催しました。会場は、旧図書館情報大学のあった筑波大学春日キャンパスの瀟洒な会場“メディアホール”。卒業生その他、つくば市民も交え約80人が、軽やかで馥郁とした、青山さんの文芸ワールドに浸りました。

青山さんは、図書館情報大学に入学し、大学統合によって、2005年に筑波大学図書館情報学群を卒業した新進気鋭の文芸作家です。「窓の灯」で第42回文藝賞、「ひとり日和」で第136回芥川賞、「かけら」で第35回川端康成文学賞をと、立て続けに賞を取っておられます。お話の中で、「窓の灯」は在学中の作品で、大学のIT実習室のパソコンを使って書き、つくばバスセンターのポストから出版社に投函したというエピソードの紹介もありました。

朗読された作品は、「ムラサキさんのパリ」と「かけら」の一節でした。朗読は、現在NHK・BS放送中の「イ・サン」出演の俳優、梶谷裕(ますたに ゆたか)さんで、陰影のある朗読で、ホール一杯に素敵な異空間を作り上げてくれました。

青山さんは、予定した作品の朗読が終了すると、「私も朗読をしたかった。」とおっしゃって、発表されたばかりのミニコミ雑誌掲載の「唇」という作品を自ら朗読してくれました。この作品は、マジックリアリズムとも言うべき作品で、青山さんの新たな境地を開く不思議な作品でした。

当日は、筑波大学の山田信博学長や、中山研究科長、溝上学群長、植松図書館長等も参加し、和やかな会となりました。



キャンパスツアー

橋会キャンパスツアーは、「青山七恵と気軽な朗読会」の前に、春日キャンパス情報メディアユニオン前に橋会の幟を2本立てて集合場所とし、2グループ、後に1グループ、計3グループに分かれて行いました。御高齢の方々や家族連れの方々、山口県や青森県の方々など27人が参加しました。案内役は現在、筑波大学附属図書館に勤務されている卒業生（金藤さん、赤津さん）にもご協力いただきました。コースは、メディアユニオンを出発点に、留学生宿舍、講義棟、学生宿舍など、キャンパスをぐるっと一回りしました。途中、図書館を見学したり、磯谷順一教授や西岡貞一教授の研究の様子も拝見しました。



青山七恵さんが加わったグループでは、コンピュータがずらっと並ぶ実習室で「窓の灯」を執筆した座席についてお話いただきました。養成所や短大の卒業生は初めて春日キャンパスに来た方も多く、東京にあった養成所や短大とは一味違った筑波のキャンパスをお楽しみいただけたようです。下馬にあった橋の木も春日の地で健やかに育ち実をつけていました。また大学の卒業生も久しぶりに春日キャンパスに足を踏み入れ、在学時との変化に感慨深く感じたのではないのでしょうか。



卒業生懇親会

卒業生懇親会は、「青山七恵と気軽な朗読会」の終了後、春日キャンパス近くの居酒屋で開催しました。約40名の幅広い年齢層の人たちに参加していただき、盛会のうちに卒業生の懇親を深めることができました。一次会だけでは物足りなく、さらに二次会へとつくばの街に繰り出して行ったグループも散見されました。



会員便り

友永由美子さん退職祝賀会

パントック京子（養成所・昭36卒）

開催日：平成21年5月2日（土）

会場：広池学園会員会館（祝宴）

麗澤大学図書館（発表）

出席者：11名



友永由美子（旧姓・松島）さんの長年にわたるレファレンサーとしての功績を称え、その退職を祝して麗澤大学図書館OBの有志が集いました。出席者は、図書館職員養成所から短大迄の同窓生5名及び同僚や上司の方々です。

友永さんは、昭和39年から麗澤大学図書館に7年間勤め、育児の為一旦退職、同59年再び職に戻られました。その時期が丁度、情報化、機械化が進んでゆく時であり、彼女はその波の中で着実に実力を培い後にレファレンサーとして活躍する基礎を築かれました。

友永さんが、利用者にとっていかになくてはならないレファレンサーであったか、その証左の一つが、彼女への謝辞が述べられている図書です。今、私の手元にあるだけでも十数冊に及んでいます。著者の一人、西鋭夫先生は、「麗澤の宝」と友永さんへの謝辞を色紙に寄せられました。

祝宴後、会場を図書館AVホールに移して、友永さんにより「麗澤大学図書館の貴重書紹介とレファレンス事例」という発表がありました。それは田中文庫、田端屋文書、麗澤大学初代学長広池千英旧蔵・社会労働関係資料、ケルムスコット版「チヨースー著作集」、

L・ハーン講義録など多様な分野にわたり現物の資料を並べ、それを使ったレファレンス事例とその結果出版された著作や、報道機関などで使われた事例が発表されました。彼女の用意周到な準備のお蔭で、各々の貴重書の特徴がわかると同時に、麗大には学外から泊まりがけで調査に来る程貴重な資料があることを知り、知的刺激に満ちた時間となりました。

朝日新聞代表取締役専務を務めた人

・・・中馬清福さんのこと・・・

平沢暢雄（養成所・昭31卒）

私は、昭和31（1956）年に文部省図書館職員養成所を卒業してから大阪難波の日本専売公社の調達部に就職しました。同専売公社では会計係りをしていたが、昭和38年に退職し、それ以後、大阪市で浴場を経営しています。図書館職員養成所を卒業しながら図書館の仕事には縁が薄かったのですが、同期の中馬清福さんのことは誇りに思っています。

中馬清福（ちゅうま きよふく）さんは、養成所在学中、特に英語が優秀でした。養成所卒業後に東京都立大学に進学され、大学卒業後、朝日新聞秋田支局に入局され、その後、朝日新聞東京本社政治部記者となられ、ずっと活躍されていました。途中、マサチューセッツ工科大学に留学されて後、論説主幹、常務取締役大阪代表、代表取締役専務兼編集担当を歴任された後、平成13（2001）年から平成15年9月まで朝日新聞常勤顧問（編集担当）を務められました。この間、新聞紙上で活躍されると共に、政治と新聞について啓発的な著作をたくさん出されています。著書に「新聞は生き残れるか」（岩波書店）、「日本の基本問題を考えてみよう」（岩波書店）、「軍事費を読む」（岩波書店）などがあります。

現在、信濃毎日新聞社の主筆をなさっておられるようですが、ますますの活躍を祈っています。

橘会からのお知らせ

橘会会報への投稿を歓迎します

橘会では、会員の皆様の会報への投稿を募集しています。同期会・同級会・同好クラブの活動報告や会員消息など、会員の皆様に関する記事を歓迎します。

記事投稿上の留意点

記事投稿者は橘会会員とします。

記事投稿者の連絡先を明記してください。(メールアドレス or 電話)

字数：600字～800字

写真：写真掲載を希望される場合は、被写体全員の了解を必ず取ってください(橘会会報

はホームページにも掲載されます)

投稿先：info@tachibana-kai.com 橘会会報編集部宛(投稿は橘会ホームページからできます。)

投稿された原稿はお返ししません。

編集部において会報への掲載が不適切と判断したものについては、掲載をお断りする場合があります。

平成 21 年度分会費納入のお願い

平成 21 年度分の会費につきまして、今年度未納入の会員におかれましては、下記郵便振替口座あてにて納入くださるようお願いいたします。

なお、通常会員の会費は 3,500 円です。また通常会費完納者(35 回分納入済みの方)には、橘会円滑な運営のため橘会固有の協力会費 2,000 円を維持費としてお願いしています。

記

振込先郵便振替

口座番号 00110-5-656101

加入者名 図書館情報学橘会

会員現勢

1. 会員数

1,677名(平成22年2月15日現在)

図大博前期	11
図大博後期	1
筑図	102
筑博図情修士	3
筑博図後期	3
筑博図前期	3
合計	1,677

2. 卒業校別内訳

卒業校	人数
文図教習所	1
文図講習所	77
国図附養	3
文図養成所	93
文図養成 A	176
文図養成 B	67
文図養成 1 B	3
文図養成 2 B	11
図短付養成	23
図短特養課	127
図短図書館	324
図短文献情	81
図大図情専	12
図大図情	538
図大図情修	18

3. 新規加入

(以下、HP 掲載では省略)



社団法人茗溪会支部図書館情報学橋会

〒305-8550 つくば市春日1-2

E-mail info@tachibana-kai.com

公式ホームページ <http://www.tachibana-kai.com/index.html>

発行：2010年3月1日